

焦点

田中悦子

あらすじ

恋でもない 愛でもない

ただあなたが必要だった

渡辺花（18）は、中学の頃から父親である渡辺耕平（49）に性的虐待を受けていた。それを知った祖母の渡辺照子（79）は精神を患い介護を必要としている。弟の渡辺雄大（15）には知られないようにと、その現実に蓋をして生活を送っていた。

ある日、耕平が営む農家にベトナム国籍のグエン・ヴァン・クオン（22）が訪れる。そこでは不法滞在となった外国人労働者を就労させていた。徘徊した照子の搜索をきっかけに、花とクオンの距離が縮まる。そんな中、クオンは花が性的虐待を受けている場面を目撃してしまい、耕平からの暴力で制圧される。翌日、入国管理局の摘発部隊が訪れる。花はクオンを逃すために手を貸すが、クオンはその手を取り、共にその町を出る。

逃亡生活の中で、クオンは花に眼鏡をプレゼントする。花は生活に支障をきたすほどに視力が悪かったが、現実を直視したくないという思いからぼやけた視界の中で生きてきた。焦点の合った世界を見つめていく中で、花は

自尊心を取り戻していく。

仕事が見つからないクオンは、知り合いの技能実習生が逃亡の果てに自死したことを知る。また、負傷した傷口から破傷風を発症させる。不安と恐怖に侵される中、入国管理局のおとり捜査から逃れる際に調査員を負傷させてしまい、失踪者を受け入れている支援団体に相談する術までも失ってしまう。

仕事を見つけた花だったが、必要書類である身分証は耕平に管理されていた。身分証を取り戻すため一度家に帰ることを決める。しかし耕平は花の自立を認めず、またも心身を犯そうとする。その現場を見た雄大は、耕平を負傷させる。性的虐待の事実を知っていた雄大だったが、花の同意があったのではないかという疑念を払い切れずにいたのだった。身分証を持った花が家を出たあと、意識を失いかけた耕平がいる家を放火する。花はクオンに電話をするが、クオンの病は進行していた。花の「全部終わった」という言葉を聞いて意識を失う。戻る場所を失った花にフラッシュバックが起こる。「全部終わる」ことなどないことを知った花は、町を去るバスの中で眼鏡を外した。

登場人物表

渡辺 花 (18) 家事手伝い

グエン・ヴァン・クオン (22) 元・外国人技能実習生

渡辺 耕平 (49) 花の父

渡辺 雄大 (15) 花の弟

渡辺 照子 (79) 花の祖母

長谷部 亘 (55) 耕平の部下

ナム (20) クオンのルームメイト

配達員

茶髪の店員 (23)

派遣会社の社長 (52)

老人ホームの施設長 (45)

クオンの母

○ 渡辺家・花の部屋（夜）

電気の消えた部屋。

遠くから消防車のサイレンが聞こえる。
寝巻き姿の渡辺花（18）、ベッドに横たわり、ぼうっと視線を漂わせている。

花 M 「羊が1匹、羊が2匹」

花の視線に切り替わる。

その視界はぼやけ、不鮮明である。

男の頭上がぼんやりと見える。

花 M 「羊が3匹、羊が4匹」

消防車のサイレンが近づいてくる。

大きなサイレンの音と共に、窓の外から

赤い光が部屋に差し込む。

その瞬間、花の視界が照らされる。

花 M 「羊が5匹、羊が――」

ぼやけた視界からも、その男が自分の体を弄んでいることが分かる。

花「……」

遠ざかるサイレンの音。

視界は暗闇に包まれていく。

○ タイトル「焦点」

○ 渡辺家・居間（早朝）

石油ストーブを開く手元。

チャッカマンを差し込み点火する。

燃烧筒がゆっくりと灯る。

花、その灯りをじっと見つめている。

× × ×

花、雨戸を開ける。朝日が差し込む。

窓の外には田園地帯が広がっている。

○ 同・照子の部屋（朝）

渡辺照子（79）、布団で眠っている。

花、照子の脇から体温計を取り出す。

照子、胆が絡むような咳をしている。

花、不安げに見つめている。

○ 同・居間（朝）

テレビには天気予報が流れている。

渡辺耕平（49）、朝食を食べている。
アナウンサー「活発な前線の影響によって、
東日本では明日の深夜から激しい雷雨が続
く恐れがあります」

花、居間に入ってくる。

花「おばあちゃん、まだ熱がある」

耕平「……」

花「病院」

耕平「大丈夫だよ。薬飲ませとけ」

花「……」

耕平「今日は外出すな」

花「……分かった」

雄大「おっはよう」

制服姿の渡辺雄大（15）、濡れた髪を

タオルで拭き、居間に入ってくる。

耕平「また走りに行ってたのか？」

雄大「ちゃんと勉強もしてますって」

耕平「高校くらい行ってくれよ？ ろくな人

生送れねえぞ」

花「……」

雄大「（明るく）試験はあるけど形だけなん

だって！ 俺の売りはこの足なの」

耕平「あのなあ、一生その足で食ってくつも

りか？ 現実を見る現実を」

花、雄大の前にご飯と味噌汁を置いて、

花「卵何個にする？」

雄大「じゃあ……3つ！」

アナウンサー「建物から吹き出す炎と黒煙。

昨晚午前2時ごろ、境郡下山町の資材置き

場で火災が発生しました」

テレビには火災の様子が映っている。

花、台所で目玉焼きを作る。

アナウンサー「この境郡下山町では先月14

日の午後0時過ぎにゴミ置き場2箇所で。

そして先週5日の午前2時過ぎに解体中の

建物で火災が発生しており、いずれも半径

2キロの範囲で相次いでいます」

耕平「うちもやられたりしてな」

雄大「……（笑って）やめてよ」

アナウンサー「警察は何者かによる連続放火

の疑いも視野に関連を調べ、周辺のパトロールを強化しています」

花、フライパンに落とした3つの卵が沸沸と一体化していく様子を眺めている。

○ 同・照子の部屋

照子、数枚の古びたタオルを畳んでいる。全て畳み終わると、それを開き、再び畳むを繰り返している。

花、宅配サービスのカタログを開き、注文書のマークシートにルーペを当てる。

拡大表示された商品番号を確認し、印を記入する。

インターフォンの音が聞こえる。

○ 同・表

花、コンテナの中身を確認している。

配達員、その様子を横目で見つけている。

花「あの、おむつって……大人用の」

配達員「え？ おむつ？」

花「（伝票を見せて）これ」

配達員「ああ……じゃあ戻ったら確認します

けど、再配達とかやってないんで。キャンセル扱いになります」

花「……」

配達員「あとは？」

花、再びコンテナの中身を確認する。

配達員、前屈みになる花の胸元をじっと

見つめている。

花「（顔を上げ）大丈夫で……」

配達員、花の胸元から視線を逸らして、

配達員「あー、来週の分は？」

花「……」

花、注文書を配達員に差し出す。

配達員、注文書を受け取る。

花を見つめニヤリと笑う。

配達員「ありがとうございますー」

配達員、その場から立ち去る。

花、口元を強く結び、俯いている。

徐々に涙が溢れてくる。

花「……」

花、コンテナを足で蹴り上げる。
商品が地面に散らばる。

じっと立ち尽くしている。

ふと視線を感じ、顔を上げる。

大きな荷物を下げたグエン・ヴァン・ク
オン（22）、玄関先に立っている。

花「……」

クオン、花のもとに歩いてくる。

クオン「ワタナベ農家さん、ですか？」

花「……（涙を拭い）はい」

クオン「わたし、グエン・ヴァン・クオンと
いいます。ミンさんの紹介できました」

花「……」

○ 同・事務所

土間にはデスクやロッカーが並んでいる。
クオン、応接ソファに座っている。

花、電話の受話器を置いて、

花「……今から迎えに来るので」

クオン「分かりました」

帽子を持った照子、土間へ降りてくる。

花「おばあちゃん？」

照子、玄関に向かって歩いていく。

花、照子を止める。

花「今日はお散歩行かないよ？」

照子「んーんっ、んーんっ」

照子、花を押し除け、進もうとする。

花「リング食べよう？ さっき届いたから」

照子、立ち止まり、クオンの向いに座る。

花「……おばあちゃん（居間を指し）向こう
で食べようよ？」

照子、ソファから動かない。

クオン「……（照子に）今日からお世話にな
ります、クオンと言います。ベトナムから
来ました。よろしく願います」

照子、ぼうつとクオンを見つめている。

花「……ほらおばあちゃん、立って」

花、照子の腕を掴み、立ち上がらせる。

照子「んーんっ！ んーんっ！」

照子、花の髪の毛を引っ張る。
花「もうっ……やめて！」

クオン、咄嗟に立ち上がり、
クオン「あの、ボクなら——」

花「テレビ付けて！」

クオン「え？」

花「テレビ！」

クオン、テレビの電源を入れる。

情報番組が流れる。

照子、テレビに気を取られる。

花、照子をソファに座らせる。

大人しくテレビを見ている。

花「……(ため息)」

クオン、床に落ちた帽子に気付く。

拾い上げ、花に差し出して、

クオン「大丈夫？」

花「すみませ(ん)——」

クオン、その髪に触れる。

乱れを整え、耳にかけてやる。

花「……！」

花、咄嗟に一步下がる。

クオン「あっ、待って」

クオン、糸くずをつまみ取る。

にっこりとほほ笑んで。

花「……」

× × ×

照子、情報番組を見ている。

花、リンゴを剥いている。

クオン、その向かいに座っている。

花、リンゴに乗せた皿を照子の前に。

照子、シャクシャクとリンゴを食べる。

花、もう一つの皿をクオンに。

花「……良かったら」

クオン「ありがとう」

照子、そのリンゴに手を伸ばして、

花「あっ、駄目だっ——」

照子、リンゴを食らう。

口いっぱい咀嚼している。

花「……(ため息)すみません」

クオン「いえいえ」

照子、ゲップをする。

花・クオン「……」

花とクオン、笑ってしまふ。

花、照子にお茶を飲ませ、口元を拭う。

クオン、その様子を見つめている。

○ 同・表々車内

クオンと耕平、軽トラに乗り込むと、

花「お父さん！」

花、運転席に駆けてくる。

花「おばあちゃんのおむつ買いたい」

耕平「配達は？」

花「来たけど……入ってなかった」

耕平「雄大に頼め。お前は家にいろ」

耕平、車を発車させる。

クオン、サイドミラーを見つめる。

遠ざかる花の姿が映っている。

耕平「パスポートとかは？」

クオン「……前の会社、持ってます」

耕平「酷えことするよなあ。そんなところっ

ちからお断りだよな？」

クオン「……」

耕平「でもまあ……普通に考えたらおかしい

よ。言葉もロクに通じない、長く雇えない

お前らに、まともに仕事教えて何になる？

ボランティアじゃあるまいし」

クオン「……」

耕平「なあ」

クオン「はい」

耕平「自業自得っていう言葉、知ってるか？」

クオン「……ジゴウ、ジトク、ですか？」

耕平、微笑みながらハンドルを回して。

○ 渡辺家・居間

花、電話をかけている。

固定電話には『雄大』と表示されている。

呼び出し音が続いている。

○ 畑

外国人労働者たち、収穫した白菜を段ボ

ールに詰めている。

クオン、汗を拭い、ふと顔を上げる。
飛行機が飛んでいる。

クオン「……」

長谷部「チンタラしてんじゃねえよ！」
クオン、咄嗟に身構えると。

長谷部巨（55）、ナム（20）の胸ぐら
らを掴み、軽トラまで引きずっている。
軽トラの下には、白菜が詰まった大量の
段ボールが置かれている。

長谷部「帰るまでに全部積んどけ」

ナム、怯えた様子で突っ立っている。

長谷部「聞こえてんのかコラ？ 手が足りね
えんだよ。誰のせいでこうなったと思っ
んだ？ ええ！」

と、ナムを足で蹴り上げる。

ナム、慌てて段ボールを持ち上げる。

クオン「……」

○ ドラッグストア・内（夕）

花、おむつ売り場で値段を見比べている。
財布の小銭を数える。

○ バス・車内（夕）

花、おむつを抱え、座っている。
自転車を走らせる中学生が見える。

花、その背中を見つめている。
バスが中学生たちを追い越していく。
制服姿の花（13）、友達と楽しそうに
自転車を走らせている。

花「……」

花、進行方向に視線を戻すと――。
脇道を歩いている照子が見える。
寝巻き姿で帽子を持っている。

花「……!!」

花、咄嗟に停車ボタンを押して。

○ 寮・クオンの部屋・内（夜）

2段ベッドが置かれた狭い部屋。
クオンとナム、夕食を食べている。

※以下、台詞ベトナム語

ナム「この部屋にいた奴が逃げたんだ……僕は
はそのことで責められてる」

クオン「君のせいじゃないだろ？」

ナム「誰だって良いんだよ。ただ見せつけて
るんだ。僕らが逆らえないように」

クオン「……」

携帯の着信が鳴る。

○ 同・表（夜）

部屋から出てきたクオン、電話に出る。

※以下、台詞ベトナム語

クオン「もしもし？ 母さん？」

母「どう？ 新しい仕事は」

クオン「うん……良いところだよ」

母「そう、良かった……あのね、今日ダンス
んと会ったんだけど、彼女の息子も半年前
に会社から逃げたんだって」

クオン「……そうだったんだ」

母「でも何とかやってみたい。仕事も色々
あるみたいで。とても元気そうだった」

クオン「そっか」

母「……大丈夫よね？ きつと」

クオン「……（明るく）大丈夫だよ。心配し
ないで」

母「うん。忙しいのに、ごめんね」

クオン「ううん。また連絡するよ」

母「体に気を付けて」

クオン「母さんも。おやすみ」

クオン、電話を切る。

クオン「……」

花の声「おばあちゃん！」

クオン、声の方向に視線を向ける。

花、畑道を彷徨っている。

誰かを探している様子が分かる。

花「おばあちゃん！ おばあちゃん！」

クオン「……」

○ 畑道（夜）

花、辺りを見渡している。

足音が聞こえ、振り返る。

クオンが立っている。

クオン「どうしたの？」

花「……」

クオン「おばあさん、探してるの？」

花「……いなくなった」

クオン「いつから？」

花「どうしよう……どうしよう」

白い息を吐く花、震えている。

上着を脱ぐクオン、花に掛けてやる。

クオン「ひとり危ない。お父さんは？」

花「……」

花、歩いていく。

クオン「……」

× × ×

花とクオン、畑道を彷徨っている。

花「おばあちゃん……おばあちゃん」

何処からか咳き込む声が聞こえる。

花、立ち止まり辺りを見渡すと。

畑の中に人影が見える。

花「おばあちゃん!？」

花とクオン、その場所へ走る。

花、ふと足を止めて、

花「……」

照子、備中鍬で畑を耕している。

花、その様子をじっと見つめている。

× × ×

※フラッシュ（5年前・夏）

照子（74）、作物を収穫している。

手伝う花、汗を流している。

照子、その汗を拭ってやる。

花を見つめ、愛おしそうにほほ笑む。

× × ×

照子、一心不乱に備中鍬を振りかざす。

畑の作物が荒らされ傷付いている。

花「おばあちゃん」

花、照子の備中鍬を掴み取ろうと、

花「おばあちゃん！ やめて！」

照子「んーんっ！ んーんっ！」

照子、花の髪の毛を掴む。

花「やめてっ——もうやめたってっば！」

花、思わず照子を突き飛ばして。

照子、バランスを崩し倒れる。

クオン、照子を抱き起こして、

クオン「お父さん、呼ぼう」

花「……携帯、持ってない」

○ 渡辺家・居間（夜）

固定電話が鳴っている。

雄大、電話に駆け寄る。

未登録の携帯番号が表示されている。

雄大「……（電話に出て）はい、渡辺です」

○ 畑（夜）

花、クオンのスマホを持っている。

※以下、花と雄大の台詞カットバック

花「雄大？ 私」

雄大「え？ 姉ちゃん？ 今何処にいるの？

姉ちゃんもばあちゃんもいないから」

花「お父さんは？」

雄大「いや、まだ帰ってないけど」

花「おばあちゃんが倒れたの！ 畑の……え

っと、役場の手前あたり。迎えに——」

クオン、畑を見渡している。

作物が荒らされ傷付いている。

クオン「（見つめ）……」

ふと気配を感じ、顔を上げる。

備中鍬を持った照子が立っている。

照子、ゆっくりと振り上げて——。

クオン「（ベトナム語）危ない！」

顔を上げる花、クオンに押し倒される。

照子、備中鍬を振り下ろす。

クオン、呻き声を上げる。

花、顔を上げると——。

クオンのふくらはぎに備中鍬が突き刺さっている。

花「（目を見開き）——」

咳き込む照子、その場に崩れ落ちる。

花「……おばあちゃん？」

照子、呼吸が乱れている。

花「おばあちゃん！ おばあちゃん！」

× × ×

救急車が停まっている。

照子、担架で運び込まれている。

クオン、その様子を見つめている。

花、クオンに駆け寄って、

花「乗って！」

クオン「ボクは大丈夫だよ」

その裾は血で染まっている。

花「……大丈夫じゃないよ」

クオン「……」

花「ごめんなさい。あの……おばあちゃん病

気なの。だから、だから私が悪いの。ごめ

んなさい。本当に……本当にごめんなさい」

クオン「誰も悪くない」

花「……でも」

クオン「大丈夫。行って？」

花「……」

○ 総合病院・廊下（翌日・早朝）

耕平、診察室から出てくる。

花、ベンチに座っている。

耕平「肺炎だとよ。しばらく入院だ」

花「……」

耕平、ベンチに座る。

耕平「うちに帰って花がいなかったとき、出

て行ったのかと思ったよ……（笑って）そ

んなはずないのにな？ お前は一人じゃ何

もできない」

花「……」

耕平「その服、どうした？」

花、クオンの上着を着ている。

花「昨日……新しくきた人が、一緒に探して

くれて」

耕平「探してくれて？」

花「……助けてくれた」

耕平「……」

花「あの人怪我したの。でも病院行かないっ

て……仕事休んでもらって、連れてってあ

げることってできないかな？」

耕平「本人がいいって言ってんだろ？ 大したことないんだよ」

花「でも」

耕平「今日はよく喋るな」

花「……」

耕平「（笑って）分かったよ。明日連れてってやるから。お前はもう心配するな」

花「……」

耕平「あとそれ脱げ」

花「……え？」

耕平「ついでに返してやるから」

花「……」

○ 畑（朝）

クオンと外国人労働者たち、段ボール詰めされた白菜を運んでいる。

長谷部「おい！ 作業止めろ！ 集まれ！」

クオン、ダンボールを下ろし長谷部のもとへ歩いていく。

× × ×

長谷部、畑の中を歩いている。

クオンと外国人労働者たち、その後を追っている。

長谷部「（立ち止まり）見ろ」

畑の作物が荒らされ傷付いている。

クオン「……」

長谷部「昨日の夜、外出した奴はいるか？」

一同、沈黙している。

長谷部、ナムの前に立つ。

長谷部「腹いせのつもりか？」

ナム「ワ、ワタシではないです」

長谷部「じゃあ誰なんだよ？」

ナム「……」

ナム、震えた手でクオンを指して、ナム「……昨日の夜、いなかったです」

クオン「……」

長谷部、クオンの前に立つ。

長谷部「お前がやったのか？」

クオン「……ボクではありません」

長谷部「じゃあ何処で何してた？」

クオン「……」

○ 渡辺家・裏（夜）

ゴミ袋を持った花、勝手口から出てくる。
トンポペールからゴミ袋を取り出している雄大、袋の中身を漁っている。

花「……どうしたの？」

雄大「いやさ、友達に借りてたプリント捨てちゃったかもで。マジやばい」

花「何のプリント？」

雄大「入試算内。広高の」

花、トンポペールを覗き込む。

ゴミ袋を取り出していくと、

花「……」

積み重なったゴミ袋の間に、クオンの上着が捨てられている。

花、その上着を拾い上げる。

雄大「あった！ あったあった！ あー、死ぬかと思っ（た）……」

雄大、花の様子に気付いて、

雄大「（上着を見て）何それ？ 父さんの？」

花「……ああ、どうだろ……一応聞いてみようかな。何かまだ着れそうだし」

雄大「良いんじゃない？ 捨てちゃえよ」

花「借りたものかもしれないし」

雄大「……」

花「良かったじゃん、見つかった」

雄大「ああ……うん」

花、ゴミ袋を片付ける。

○ 同・事務所（夜）

耕平、事務作業をしている。

上着を持った花、事務所に降りる。

花「お父さ——」

長谷部、玄関から入ってくる。

長谷部「あ、社長。お疲れ様です」

耕平「お疲れ。遅かったな」

長谷部「お嬢さんも。お久しぶりですな」

耕平、花に視線を向けて、

耕平「（上着を見て）……」

長谷部「いやあ、電話でお伝えした件なんですけど。畑がえらいことになってまして」

花「……」

耕平「で、どうした？」

長谷部「あの新人がやったかは別としてですよ？ 何処で何してたのか言えないっていうのは、少し問題があるかと」

耕平「大問題だろ。外うろつかれて何かあったらどうすんだよ」

長谷部「あ！ いえなので、今日はまだ倉庫でやらせてますんで」

花「あの」

耕平「……」

花「昨日のことって」

耕平「なんだ？ 昨日のことって」

花「え？ だから」

耕平「あーなんか疲れたな。悪いな。いつも面倒かけて」

長谷部「え？ いえいえ！ 私は全然」

耕平「たまには一杯行くか」

長谷部「あ……はい！」

耕平「ちよっと出てくる」

花「待ってよ！ え……病院は？」

耕平と長谷部、玄関から出ていく。

花「……」

○ 倉庫・内（夜）

クオン、農機具を洗浄している。

その手は赤く悴んでいる。

シャツターが開く音が聞こえる。

顔を上げると花が立っている。

クオン「……」

× × ×

花、包帯の封を開けている。

クオンの足には生々しい傷がある。

花「（見て）……」

クオン、消毒液を手に取る。

傷口に垂らし顔をしかめる。

花「……なんで、病院行かなかったの？」

クオン「……」

花「私が余計なこと言ったから？」

クオン「ヨケイなこと？」

花「……おばあちゃんのこととか」

クオン「ほほ笑み首を振る。」

クオン「違うよ。そうじゃない」

花「……」

クオン「ボクは、日本いては、いけない。自分を証明するもの、持ってない」

花「……どうして？」

クオン「前の会社に取りられた。逃げられないように」

花「……」

クオン「でも、お金くれない、殴られる。我慢できなかった……だからここに」

花「帰れないの？ ベトナムに」

クオン「……お金、沢山借りて、日本きたよ。このまま帰ったら、家族が困るよ」

花「……」

クオン、包帯を巻こうとするが、手が悴み上手く巻けない。

花、その包帯を手に取り、巻いていく。

クオン「……ジゴウジトクって、どんな意味？」

花、手を止めて、

花「……誰かに言われたの？」

クオン「……」

花、包帯を巻きながら、

花「あなたは悪くないって意味」

クオン「……（クスツと笑う）」

花「なに？」

クオン「それは、ウソだよね？」

花「……（苦笑い）」

花、包帯を巻き終えて、

花「でも凄いね」

クオン「……」

花「だって、それでもこうやって、頑張ってる……（笑って）私なんか絶対にできない」

クオン「……」

花「強い人なんだね。あなたは」

クオン「ちがうよ」

花「……」

クオン「ただ……全部、なかったことにして帰ること、できないから」

花「……」

クオン、ズボンの裾を下ろしながら、

クオン「ありがとう。もう大丈夫だよ」

花「……ねえ、知ってる？」

クオン「……？」

花「羊が1匹、羊が2匹」

クオン「……ヒツジ？」

花「日本だけなのかな？ 眠れないときに羊

を数えるの。ほら、眠れないときって余計

なこと考えちゃったりするでしょ？ だか

ら羊を数えることだけに集中するの。それ

で、気付いたら眠れるっていう」

クオン「……（笑って）それは、もっと眠れ

なくなりそうだよ」

花「うん……でもね、私は何も考えたくない

ときにそれをするの。何か、しんどいなあ

とか……良く分かんないけど、嫌だなあと

か、そういうときに」

クオン「……」

花「やってみたら良いよ。あなたも」

クオン「……」

花「もしかしたら……全部、なかったことに

できるかもしれないよ？」

クオン「……」

ポツポツと雨が降る音が聞こえる。

クオン、倉庫の外に視線を向ける。

雨が降っている。

花「（外を見つめ）……雨？」

クオン「……（花を見つめ）」

花「ああ、目悪いの……（笑って）あなたの

顔も、ぼんやりとしか」

クオン「……メガネ、しないの？」

花「このくらいが丁度良いから」

クオン「……」

花「あの、これ使って？」

と、折り畳み傘を取り出す。

クオン「だけど」

花「大丈夫、うち近いから」

花、折り畳み傘を置いて立ち上がる。

クオン「あのー」

花「あ！ そうだ、ごめんなさい。服借りたままで。洗って返すね」

クオン「……ああ、うん」

花「じゃあ、おやすみなさい」

花、倉庫を出ていく。

クオン「……」

○ 同・表（夜）

花、小雨の中を歩いている。

クオン「待って！」

振り返るとクオンが立っている。

花「……」

クオン「羊、数えてみるよ」

花「……（ほほ笑む）」

クオン、花をじっと見つめている。

クオン「あなたは悪くない」

花「……え？」

クオン「……（笑って）さっき、嘘でも嬉し

かったよ。ありがとう」

花「……」

雄大「姉ちゃん？」

花、声の方向へ視線を向ける。

自転車に乗った雄大、花とクオンを見つ

めている。

花「……」

花、雄大のもとへ歩いて、

花「何してるの？」

雄大「友達の家行ってた。プリント返しに」

花「……行こう？」

雄大「（クオンを見て）いいの？」

花、無言で歩き始める。

雄大、その後を追う。

クオン、花の背中を見つめている。

○ 畑道（夜）

雄大と花、二人乗りをしている。

雄大「なに話してたの？」

花「……うん、べつに」

雄大「友達できた？」

花「……（笑って）友達って」

雄大「やっべ！ 降ってきたな」

と、スピードを上げる。

花「……あの人と会ってたこと、お父さんに

は言わないでおいで」

雄大「なんで？」

花「……」

雄大「言わないよ、いちいちそんなこと」

花「……（笑って）そっか」

雄大、サドルから腰を浮かせて、

雄大「姉ちゃんすげえ重くなった！」

花「……」

花、ふと夜空を見上げる。

月が雨雲に隠れていく。

○ 渡辺家・花の部屋（夜）

花、ベッドで横になっている。

玄関が開く音が聞こえる。

花「……」

窓の外から光が差し込む。

落雷の音が聞こえてくる。

○ 同・居間（夜）

電気の消えた部屋。

耕平、酔った足取りで居間に上がる。

グラスに注いだ酒を一気に飲み干して、

耕平「……」

ビデオデッキの電源を入れ、再生する。

庭先で花（5）と雄大（2）、母親らし

き女性が水遊びをしている。

花、ニコニコとカメラに歩いてくる。

○ 倉庫・内（表）（夜）

雨が強まっている。

クオン、折り畳み傘を見つめている。

ふと倉庫の外に視線が止まる。

錆びれた傘が数本捨てられている。

クオン「……」

シャッターを下ろし鍵を閉める。

○ 渡辺家・花の部屋（夜）

花、ベッドで横になっている。
階段を登ってくる足音が聞こえる。
重い足取りが近づいてくる。
花、布団を体に引き寄せせる。
足音が止まる。

花「……」

ドアが開く。

花、固く目を閉じる。

花M「……羊が1匹、羊が2匹」

○ 同・前の道（夜）

クオン、錆びれた傘を差して歩いている。
門扉に足を踏み入れた瞬間、中から飛び
出てきた人物と衝突し倒れ込む。

クオン「（足を庇い）——」

クオン、顔を上げる。

尻餅を付いた雄大がいる。

クオン「……あの」

雄大、咄嗟に立ち上がる。

逃げるように走っていく。

クオン「……」

○ 同・玄関／事務所（夜）

クオン、玄関から入ってくる。
事務所のキーボックスに鍵を返却する。
ポケットから折り畳み傘を取り出して、

クオン「……」

奥へ進み、居間を覗くと——。

テレビには砂嵐が流れている。

○ 同・花の部屋（夜）

耕平、酔った足取りでベッドに上がる。

花M「羊が3匹、羊が」

耕平「あの服どこやった？」

花「……」

耕平「（笑って）まあ良いや。ただ、もうあ
いつには関わるな」

耕平、布団の中に手を入れる。

花 M 「……羊が1匹、羊が2匹」

耕平 「明日ばあさんに着替え持ってってやれ」

花 M 「羊が3匹、羊が4匹」

耕平 「たまには買いい物でもしてこいよ？ 髪

もさ、そろそろ切るころだよな？」

花 M 「羊が5匹、羊が6匹、羊が——」

耕平、花の頭を優しく撫でる。

その髪を耳にかけてやる。

花 「……!!」

花、思わず耕平の手を払う。

静寂の中、雨の音が聞こえる。

花、ゆっくりと顔を上げる。

耕平の表情が消えている。

花 「……やめ」

耕平、布団を剥いで、花に跨がる。

抵抗する花、耕平の膝を押し倒すと——。

バランスを崩した耕平、床に転落する。

花 「……ごめ……ごめんなさ」

耕平、ゆっくりと起き上がる。

○ 同・玄関（夜）

大きな物音が聞こえる。

クオン、咄嗟に天井を見上げて、

クオン 「……」

○ 同・階段／廊下

クオン、恐る恐る階段を上がり、2階へ。

手前の部屋には『はな』と書かれたプレートが掛かっている。

クオン 「……」

クオン、そのドアをゆっくりと開ける。

暗がりの中、ローテーブルが倒れている。

クオン、視線を上げると——。

ベッドで重なり合う男と女が見える。

クオン 「……」

部屋に強い光が差し込む。

男女の姿が照らされる。

耕平が花の体を弄んでいる。

クオン 「（目を見開き）……」

落雷の音が聞こえる。

クオン、折り畳み傘を床に落とす。

耕平、咄嗟に顔を上げる。

花、ぼんやりと視線を向ける。

クオン「（見つめ）……」

耕平、ゆっくりと立ち上がり、クオンの前で立ち止まる。

クオン「……」

耕平、クオンの腹部を蹴り上げる。

花「!!」

クオン、廊下に崩れ落ちる。

耕平「どうした？ 仕事は終わったか？ こんなところで何してる？ 不法侵入で警察に突き出すぞ？」

耕平、クオンの胸ぐらを掴んで、

耕平「（笑って）その前に不法滞在か」

何度もクオンを殴りつける。

花、部屋から出てくる。

口から血を流したクオン、倒れている。

花「（目を見開き）——」

耕平、クオンの腕を捻り上げる。

花「お父さん!!」

花、耕平の腕に掴みかかる。

花「やめて！ やめてよおお!!」

耕平「うるせえなあ！」

耕平、花の腹部に拳を入れる。

クオン「!!」

花、咳き込みながら崩れ落ちる。

耕平、花を部屋に引きずり戻して。

外からドアを閉める。

耕平「……（ため息）お前さ、こんなことのために日本に来たのか？」

クオン「……」

耕平「それともアレか？ いっそ全部捨てちまうか？ 一生ここでタダ働きさせてやるよ。そしたらずーっと、こいつの側にいられるぞ？」

クオン「……ボクは」

耕平、クオンの頭を掴んで、

耕平「お前が消えたって誰も気付かねえよ」

クオン「……」

○ 同・花の部屋（夜）

花、ふらつきながらも立ち上がる。

ドアノブに手を掛けて、

花「お父さん？ ……開けてよ！（ドアを叩き）ねえ！ お父さん！ 開けて！」

○ 同・廊下（夜）

壁に頭を打ち付けたクオン、崩れ落ちる。

耕平、ドアを開け、部屋に入る。

花、その隙間からクオンを見て、

花「……!!」

耕平、花を部屋に押し戻す。

部屋の中からドアが閉まる。

クオン「……」

クオン、ただそのドアを見つめている。

○ 田園地帯・実景（翌日・朝）

雨が激しく降っている。

○ 渡辺家・居間（朝）

花、台所で目玉焼きを作っている。

3つの卵が焼かれている。

花「（見つめ）……」

その卵をぐちゃぐちゃとかき混ぜる。

× × ×

テレビにはニュースが流れている。

耕平と雄大、朝食を食べている。

花、箸を持つ手が止まっている。

耕平「お前また走りに行ってただろ？」

雄大「あ、バレてました？」

アナウンサー「昨晚午前1時ごろ、境郡下山

町の空き家で火災が発生しました。この境

郡下山町では先月から昨夜まで4件の火災

が発生しており」

雄大「姉ちゃん、食わないの？」

花、ぼうつとニュースを眺めている。

雄大「……（明るく）つかこれスクランブル

エッグ？ 俺こっちの方が好きかも」

アナウンサー「また、総務省消防庁が、鏡や虫眼鏡によって、太陽の光が一点に集中して発生する〈収れん火災〉が、冬場に多く発生するとして注意を呼びかけています」

画面には太陽の光に虫眼鏡を当て、黒い紙に近づける実験の様子が流れている。

アナウンサー「このように、凸レンズで太陽の光を集めると、光が集まった点の温度が高くなります。この光が集まったところを〈焦点〉と言い、その場所にあったものが燃える可能性があります」

黒い紙の一点に光が集中し煙が発生する。紙を焦がし、ボカンと穴が開く。

花、その穴を見つめている。

アナウンサー「窓際や、太陽の光が届く範囲には、鏡や金魚鉢、虫眼鏡などを置かない。カーテンで光を遮るなどの」

耕平「おい、聞いてんのか？」

花、耕平に視線を向ける。

耕平「（笑って）何ボケッとしてんだよ？」

耕平、財布から5千円札を取り出し、花の前に置いて、

耕平「ばあさん、頼んだぞ」

花「……うん。分かった」

○ 同・事務所

荷物を持った花、事務所に降りる。

耕平、電話をしている。

ゴルフクラブを手入れしながら、

耕平「私も迂闊でした。いえいえ！ 社長に教えていただけるなんて光荣ですよ。では後ほど。失礼します」

合羽を着た長谷部、玄関から入ってくる。

長谷部「いやあ、今日は難しいですね」

耕平「午後も中止だ。連絡しとけ」

花、玄関へ向かう。

○ 同・表す前の道

花、折り畳み傘を手に、

花「（見つめ）……」

パツと広げて、歩き出す。
ウインドブレーカーを着た数人の男女と
すれ違い、振り返ると――。

玄関に向かっている。

その中の一人、インターフォンを押して。
ドアが開き、長谷部が出てくる。

長谷部「……どなたさんですか？」

調査員「入国管理局の者です」

長谷部「……」

調査員「先月までチャン・ヴァン・テイエン
さんと言う方を雇われていましたよね？」

長谷部「……いやあ」

調査員「従業員の方のアパートがありますよ
ね？ 身元の確認をさせていただきたいの

ですが、ご協力いただけますでしょうか？」

花「……」

花、門扉を出る。

徐々に早足に、傘を捨てて走り出す。

○ 寮・クオンの部屋・内

クオン、ベッドに横たわっている。

ナム、スマホの通話を切る。

※以下、台詞ベトナム語

ナム「午後も中止だ。伝えてくる」

クオン「こんなハズじゃなかったよな？」

ナム「……」

ナム、玄関で靴を履いて、

ナム「僕たち、運が悪かったんだよ。ただそ
れだけだよ」

クオン「……」

○ 畑道

地面に叩きつける強い雨。

花、必死に走り続ける。

○ 寮・クオンの部屋・内

窓を叩く音が聞こえる。

クオン、外を見ると花が立っている。

ベッドを降りて窓を開ける。

クオン「どうしたの？」

花、苦しそうに呼吸を荒げている。

クオン「大丈夫？」

花「―――げて」

クオン「……ええ？」

花「逃げて！」

○ 雑木林へ国道

花とクオン、走っている。

草木を掻き分け国道に出る。

花「こっち！」

× × ×

バスが停留所に停車している。

花とクオン、停留所に駆け込む。

バス後方の乗降口で立ち止まる。

花「駅まで行けるから」

クオン「……」

クオン、乗降口に上がる。

花「ごめんね」

クオン「……」

花「（笑って）さよなら」

発車アナウンスが鳴っている。

花、立ち去ろうと―――。

クオン、その腕を掴んで。

花を乗降口に引き上げる。

花「!!」

花、クオンの胸に引き寄せられる。

乗降口のドアが閉まる。

花「……」

花、クオンを見上げる。

クオン、花を見つめている。

× × ×

バスが停車する。

数人の乗客がバスを降りる。

花、乗降口に視線を向ける。

花「……」

ドアが閉まり発車する。

花、窓の外を眺める。

遠ざかる田園風景。

バスが大きな河川を渡る。

雨雲から差し込む光芒。

川面がその光を反射している。
花「（見つめ）……」

クオン、その横顔を見つめる。
河川を越えると家屋が立ち並んでいる。
花、移り変わる景色を眺めている。

○ 漫画喫茶・個室（夜）

花、ドライヤーでコートを乾かしている。
ドアをノックする音が聞こえる。

クオン（オフ）「入って良いかな？」

花「……」

花、ドアを開ける。

洋服を持ったクオン、部屋に入ってくる。

クオン「着替え。少し大きい思いますが。シャワーも浴びれるよ」

花「……」

花、洋服を受け取る。

クオン「前の会社から逃げたとき、ここ泊まっていた。ちよつと狭いけど……これ、そのときもらったよ」

『回数割引券 20%OFF』と書かれたチケットが5枚ほど綴られている。

クオン「もつとあったはずんだけど、使わないと思って捨てたかも。何あるか分からないね」

花「……」

クオン「ボクは……なかったことには、できないよ。運悪かったとも、思いたくない」

花「……」

クオン「ここでまた、仕事探すよ。見つかるか、何処になるか、分からないけど」

花「……」

クオン「ボクにできることあったら、言って欲しい。（笑って）あー、お金なら少しあるよ。心配しないで」

花「なんで？」

クオン「……」

花「なんで、私なんかに」

クオン「……明日、行きたいところあるよ。一緒に行ってくれる？」

花「……どこ？」
クオン「シヨップینگ」

○ デパート・内

活気あふれる館内。
クオンと花、エスカレータに上がって、
花「（戸惑い）……」

○ 同・眼鏡シヨップ

様々なデザインフレームが並んでいる。
クオンと花、その中を歩いている。
クオン、フレームを手に取り、
クオン「かけてみて」

花「え……私？」

クオン「プレゼントするよ」

花「え！　なんで？　いいよ」

クオン「ボク、とてもハンサムだよ。ちゃん
と見えないの、勿体ないよ」

花「……」

× × ×
花、フレームを試着している。
クオン、その度に褒めている。

× × ×
花、苦笑しながらもフレームを選んで。

× × ×
花、視力測定をしている。
検眼機のレンズが入れ替わる。

× × ×
徐々に視界が鮮明になっていく。

× × ×
クオンと花、レジに立っている。

店員「申し訳ありません。お客様に合ったレ
ンズの在庫を切らしております。来週
お渡しになってしまいますが」

花「……あの、やっぱり」

クオン「大丈夫です。お願いします」

クオン、引換票に記入をする。

花「やっぱりいいよ、キャンセルしよ？」

クオン「どうして？」

花「だって……それまでどうするの？」

クオン「どうしたい？」

花「……」

クオン「ここにいようよ」
花「……いいの？」
クオン「うん」
花「……」

○ 漫画喫茶・前の道（夜）

花とクオン、歩いている。
花、ふと立ち止まる。
クオン「……どうしたの？」
花「部屋……同じで大丈夫だから。お金かか
っちゃうし」
クオン「え？ でも」
花、歩いていく。

○ 同・個室（夜）

クオンと花、座っている。
クオン「……あの、やっぱり」
花「おばあちゃんが病気になったの……私の
せいなんだ」
クオン「……え？」
花「……お母さんが出て行ってから、私には
おばあちゃんしかいなくて。いつだって優
しくて、大好きだった。だから……だから
ね、おばあちゃんには話したの」
クオン「……」
花「そしたら、誰にも話しちゃいけないって。
あつてはならないことだって。その日から
おばあちゃん、畑にも行かなくなつて……
誰とも口聞かなくなつて」
クオン「……」

花「これは本当に誰にも話しちゃいけないこ
となんだって思った。特に弟には……絶対
に知られたくなかった」
クオン「ずっと、聞きたかったことあるよ」
花「……なに？」
クオン「初めて会ったとき、どうして泣いて
たの？」

花「……（苦笑して）ああ、あれね。そんな
大したことじゃなかったの。うーん、まあ
泣くほどじゃないっていうか……でもたま

にああやって、小さなことに無性に腹が立って。馬鹿にされたみたいで悔しくて……気持ちを抑えられないときがあつて」

クオン「……」

花「何に怒ってたかも……分からなくなつて」

クオン「……」

花「消えたくなる」

クオン「……ハナは」

花「……」

クオン「ボクのこと、怖い？」

花「……」

花、小さく首を振る。

クオン、花の体を抱き寄せる。

花「……あなたは良い人だと思う」

クオン「……」

花「私ね……他に何もできないから」

クオン「……」

花「だから……だから良いよ？」

クオン、花と向き合つて、

クオン「……なに言つてるの？」

花「だって……じゃないと、じゃないと私、

ここにいちやいけないうような気がする」

クオン「……」

花「どうして私と一緒にいるの？」

クオン「……」

花「……ねえ、何して欲しい？」

クオン「違うよ」

花「私じゃ駄目？」

クオン「そうじゃない」

花「じゃあどうして!？」

クオン「……」

ドアをノックする音が聞こえる。

店員「お客様ー？ どうされました？」

クオン「……」

クオン、ドアを開ける。

茶髪の店員（23）が立っている。

クオン「すみません、大丈夫です」

店長「（花を見て）……失礼しましたー」

ドアが閉まる。

クオン「……少し、外出ようか？」

花「……」

○ 街中（夜）

クオンと花、歩いている。

花「……ねえ」

クオン「……」

花「子供だと思ってる？ 私のこと」

クオン「子供でしょ」

花「いくつだと思ってるの？」

クオン「あー、14くらい？」

花「……ヒドい」

クオン「いくつなの？」

花「18」

クオン「（笑って）若いね」

花「クオンは？」

クオン「ボクは22だよ」

花「……4つしか変わんないじゃん」

クオン「年齢のこと言ったんじゃないよ」

花「……」

○ マクドナルド・内（夜）

花、カウンタ―に座っている。

トレーを持ったクオン、隣に座って、

クオン「コーヒー、飲める？」

花「……飲めるよ」

一口の飲む花、顔をしかめる。

クオン「（笑って）何でも良い言ったから」

花「……」

クオン「さっき、本当は少し、危なかった」

花「……」

クオン「だから外出たよ」

花「だったら」

クオン「ボクは、経験ない」

花「……」

クオン「子供だと思う？」

花「……そういう意味で言ったんじゃない」

クオン「ここにいる理由欲しい？」

花「……（頷く）」

クオン「……じゃあ、これから毎日、夜はこ

こで、飲めないコーヒーを飲んで、ボクの

話に付き合う。どうかかな？」

花「……そんなの」

クオン「大変だよ？ ボク、話がつまらない
よく言われるから」

花「……私は、そうは思わないけど」

クオン「会ったばかりだから。そのうち、
あーつまらないなるよ」

花「……念のため、聞くけど」

クオン「ネンノタメ？」

花「ああ、えっと……一応、聞くけど」

クオン「うん」

花「私が……私のそういう……そういうの
を知ってるから嫌なんじゃないよね？」

クオン「……」

花「私が」

クオン「ボク、言ったよね？」

花「……」

クオン「キミは悪くない」

花「……」

クオン「なにか食べる？」

花「え？ ……ああ、ううん。大丈夫」

クオン「つまらない話、聞くんだよ？」

花「……じゃあ、アップルパイ……あ、やつ
ばポテトかな。えっと」

クオン「一緒に行こう？」

花「……（ほほ笑み）うん」

花とクオン、レジへと向かう。

○ 漫画喫茶・個室（日替わり）

クオン、スマホをスクロールする。

ベトナム語で表示されたアカウントを選
択し、チャットを開く。

※以下、メッセージベトナム語

『母から聞きました。僕も会社から逃げ
て、仕事探しています。連絡ください』と
メッセージを入力していく。

○ 同・コミックコーナー

花、ドリンク片手に本棚を見上げている。
少女漫画が並んでいる。

○ 同・個室

数冊の少女漫画が積まれている。

花、夢中で漫画を読んでいる。

ドアが開き、クオンが入ってくる。

クオン「お弁当、買ってきたよ」

花「……え？ あ、ごめんなさい！一緒に
行ったのに」

クオン「息、してないみたいに読んでたから。
……ラブストーリー？」

花「ああ、うん。昔読んでたやつなの。なん
か懐かしくて」

クオン「面白い？ 読んでみようかな」

花「中学の頃ね、凄く好きで。この主人公の
髪型真似したりして」

クオン「可愛いね」

花「でも急に……なんか、くだらないあつ
て思ったの」

クオン「……」

花「なんでこの子、こんなことで泣くんのだろ
うとか。こんなこと現実にあるわけないじ
ゃん、とか……なんか馬鹿馬鹿しくなっち
やって、途中でやめちゃったんだ」

クオン「……」

花「でも……なんかね、なんでだろ。この子
に、頑張れ！ って思えたの。昔みたいに。
……（笑って）勝手だよね？」

クオン「……」

クオン、弁当を取り出して、

クオン「どっちがいい？」

とんかつ弁当と野菜炒め弁当がある。

花「……こっち（野菜炒め）かな」

クオン「本当？」

花「……（とんかつを見て）」

クオン「どうぞ」

花「いいの？」

クオン「食べたいんでしょ？」

花「お肉……好きだって言ってたから」

クオン「いいんだよ、勝手に」

花「……え？」

クオン「もっと勝手になっいいんだよ」

花「……」

クオン、袋から唐揚げを取り出す。

野菜炒め弁当の上に置いて、

クオン「こっちはこれが付いてくるよ」

花「え？ 聞いてない！」

クオン「（笑って）どうする？」

花「……とんかつ」

クオン「じゃあ、いただきます」

花「いただきます」

花、とんかつを頬張っている。

クオン、その姿を見てほほ笑む。

○ マクドナルド・内（日替わり・夜）

花とクオン、ポテトを分け合っている。

楽しそうに会話を弾ませている。

○ 漫画喫茶・個室（日替わり）

クオン、SNSのチャットを開く。

メッセージの返信はない。

クオン「……（ため息）」

○ マクドナルド・内（日替わり・夜）

花とクオン、ポテトに手を伸ばす。

パックの中身は空である。

花・クオン「（笑ってしまう）」

○ 漫画喫茶・個室（夜）

電気の消えた部屋。

花とクオン、寄り添うように眠っている。

○ デパート・屋上（日替わり）

花、ベンチに座っている。

眼鏡ケースを取り出して、

花「……」

× × ×

花、フェンスへ歩いていく。

青空の下、街の景色が広がっている。

花、眼鏡をかけている。

いつまでもその景色を見つめている。

○ 渡辺家・花の部屋

耕平、筆筒や机の中身を漁っている。
苛立った様子で机上の物をぶちまける。
雄大、部屋の外で立ち止まって、

雄大「……おかえり」

耕平「……」

雄大「どうだった？」

耕平「……父さんはな、可愛そうな奴らを助けてやっただけなんだ。もとはと言えば誰が悪い？ 偉そうに説教たれやがって……あいつらみんな無能だよ」

雄大「……」

耕平「お前、本当になにも知らないのか？」

雄大「……姉ちゃんだって子供じゃないんだし。そんな心配しなくて大丈夫だよ」

耕平、クローゼットを開ける。

雄大「もし姉ちゃんが帰って来たら……そのときは怒ったりしないやって」

耕平、その手を止めて、

耕平「……怒る？」

雄大「……」

耕平「（笑って）怒ったりなんかしない」

雄大「……うん」

耕平「今まで以上に優しくするよ」

雄大「……」

耕平、クローゼットを漁っている。
大きく膨らんだポリ袋が置かれている。
耕平、そのポリ袋を開けると――。
クオンの上着が入っている。

耕平「……」

ポケットから紙片が覗いている。

耕平、その紙片を引き抜いて、

耕平「……」

一部を切り捨て、部屋を出る。

雄大「父さん！」

雄大、部屋の中に視線を戻すと。
クオンの上着と紙片が落ちている。

雄大「……」

○ ATMコーナー・内

クオン、引き落とし操作を行っている。
明細書の残高には15万円ほどの金額が
記載されている。
クオン、明細書を丸めゴミ箱に捨てる。

○ 同・表

クオン、入口から出てくる。
携帯の受信音が鳴る。
スマホには花から『いつもの部屋です』
とメールが届いている。

○ 漫画喫茶・個室

花、求人雑誌を捲っている。
メールの受信音が鳴り、パソコンを見る。
クオンからメールが届いている。
『遠くでお金おろした。今から帰る』と
書かれており『了解です』と返信を打つ。
雑誌を手に横たわる。

○ 渡辺家・居間

固定電話の『発信／着信メモリ』ボタン
を押す雄大、履歴を遡っている。

○ 駅・改札・内

携帯の着信が鳴る。
クオン、スマホを見ると。
未登録の電話番号が表示されている。
クオン「……（電話に出て）はい」

雄大「あの……姉ちゃん、一緒ですか？」
クオン「……」

○ 渡辺家・居間

雄大、受話器を持っている。
手元の紙片に視線を落として。
『回数割引券 20%OFF』と書かれ
たチケットが3枚ほど綴られている。
裏面には店舗名が記載されている。

※以下、カットバック

雄大「南沼田の、漫画喫茶」
クオン「……え？」

雄大「父さんが……そこに」

○ 駅・階段

発車メロデーが鳴っている。
クオン、階段を駆け上がる。

○ 漫画喫茶・個室

メールの受信音が鳴る。
パソコンにはクオンからの新着メールが表示されている。
求人雑誌を開いた花、眠っている。

○ 同・受付

待合席には数名の客が待機している。
耕平、店に入ってくる。

受付には茶髪の店員が立っている。

店員「すみません、ただいま満室と」

耕平「こいついるか？」

店員「え？」

耕平、スマホで花の写真を見せる。

店員「……あの、すみません。そういうことは教えられないんすよ」

耕平、店内へ進んで。

店員「え？ あのこと……ちょっと！」

○ 街中

クオン、必死に走っている。

○ 漫画喫茶・個室ブース

クオン、ブースに入ってくる。

クオン「（息を切らし）……」

店員「何やってんすか！」

クオン、通路を覗き込むと――。

茶髪の店員、耕平に詰め寄っている。

利用客たちが顔を覗かせている。

店員「勝手なことしないでくだ」

耕平、店員を突き飛ばして。

利用客たちの悲鳴が上がる。

耕平、個室のドアを開けていく。

クオン「……!!」

クオン、ある場所に視線を止める。
火災報知器が設置されている。

○ 同・個室

花、寝返りを打っている。
気持ち良さそうに眠っている。

○ (回想) 渡辺家・花の部屋 (5年前・夕)

ひぐらしが鳴いている。
部屋にはプールバッグが落ちている。
花、気持ち良さそうに眠っている。
ふと目を覚ます。

背後から下半身を触られている。

花「(訳が分からず) ……」

花、恐る恐る視線を上げる。
窓ガラスには自分の体を弄んでいる耕平の姿がぼんやりと映っている。

花「……」

火災報知器のベルが聞こえる。

○ 漫画喫茶・個室

花、目を覚まして。

火災報知器のベルが鳴っている。

花「……(我に返って)」

ドアを開け、通路を覗き込む。
個室から次々と利用客が出てくる。

「火事?」「やばくない?」と言った声
が上ががり、騒然とした様子。

ふと通路の奥に視線を向ける。
耕平がブースを見渡している。

花「……!!」

花、咄嗟にドアを閉める。

息を荒げ、その場にしゃがみ込む。

○ 同・個室ブース

利用客たち、個室から避難している。
クオン、その流れに逆らい通路を進む。
とある個室のドアを開くと――。

クオン「……」

荷物はそのまま、花の姿が消えている。

○ 同・女子トイレ
鍵が掛かった個室。

花、閉じ込もっている。

パニック状態で体を震わせている。

火災報知器のベルが止まる。

花「……」

○ 同・非常口へ表

利用客たちが避難している。

クオン、その中から花を探している。

○ 同・通路

花、恐る恐る、通路を覗き込む。

人気はなく静まり返っている。

辺りを見渡しながら歩き始める。

○ 同・受付

花、受付へ歩いていく。

店長が利用客たちが揉めている。

店長「申し訳ありません！ 先ほどの非常サ

イレンは誤作動だと思われまますので、外に

出る方は順番にご精算をお願いします！」

花、行き場をなくし振り返ると――。

通路の奥に耕平が立っている。

花を見つめている。

花「（目を見開き）……」

耕平、歩いてくる。

花、その場から走り去る。

○ 同・コミックコーナー

花、本棚の影に逃げ込む。

その先は行き止まりである。

花、しゃがみ込んで、

花「（息を震わせ）……」

ふと視線を上げる。

窓ガラスには周囲を見渡している耕平の

姿が映っている。

その耕平と視線が合って――。

花「……」

耕平、こちらに歩いてくる。

花、その姿をじっと見つめている。

× × ×

※フラッシュ（5年前・夏）

窓ガラスには自分の体を弄んでいる耕平の姿がぼんやりと映っている。

徐々に視界のピントが合わさる。

耕平の顔が鮮明に映し出される。

× × ×

花、咄嗟に立ち上がる。

窓を開け、サッシに足を掛ける。

耕平「花!!」

○ 同・表

クオン、その声に顔を上げる。

クオン「（花の姿を捉えて）……!!」

花、窓から飛び降りる。

クオン、花のもとへ走る。

○ 同・コミックコーナー

耕平、窓から下を覗き込み、

耕平「（啞然と）……」

○ 同・表

花とクオン、抱き合うように倒れている。

花「……」

花、咄嗟に窓を見上げる。

耕平の姿は消えている。

花、その場所を睨みつけている。

クオン「（花を見つめ）……」

× × ×

耕平、人混みの中で足を止める。

花とクオンが見当たらない。

○ 道路

花とクオン、タクシーに乗り込んで、

クオン「行ってください!」

花、振り返る。

道路に駆け込んでくる耕平が見える。

耕平、周囲を見渡している。

花「……」

○ 自動販売機（夕）
ペットボトルが取り出し口に落ちる。
クオン、その前に座り込んで、
クオン「……」

○ 公園（夕）
花、ベンチに座っている。
クオン、ペットボトルを差し出すと、
花「……ありがとう」
クオン、ベンチに座る。

花「思い出したの」
クオン「……」
花「……ずっとね、あの頃の記憶が曖昧で。
いつ、どんな風に始まったのが思い出せ
なくて」
クオン「……」
花「最初は、何されてるのか分からなくて」

○（回想）渡辺家・花の部屋（5年前・夕）
ひぐらしが鳴いている。
部屋にはプールバッグが落ちている。
花、窓ガラスに映る耕平を見つめている。
花（オフ）「きつと私の勘違いだったんだっ
て思った。でも……やっと思えたとき、
また始まって」

○（回想）中学校・教室・廊下（5年前）
花、友達と楽しそうに話している。
花（オフ）「だから、私だけじゃないんだっ
て。みんなそうなんだって思い込もうとし
た。みんな言わないだけで、これが普通な
んだって……だから、こんなに嫌だっと思
う自分がおかしいんだって」
数名の男子生徒が会話に加わってくる。
花、さりげなく席を立ち、廊下に出る。
スカートの裾を握っている。

○（回想）渡辺家・居間（5年前・夜）
夕飯を食べている耕平、照子、雄大、花。
花（オフ）「私の家は普通だって。なんの間

題もないって……私になにも考えなければ
良いつて、そう思ってた」

耕平、テレビを見ている。

照子と雄大、会話を弾ませる。

花、ぼうっと食事を口に運んでいる。

○ 公園（夕）

クオン「……」

花「でももうできない」

クオン「……」

花「……帰りたくない」

クオン「……」

花「帰りたくないよお」

クオン「……」

○ 電車・車内（夜）

混み合う車内。

クオンと花、揺られている。

都心の風景が近づいてくる。

○ 漫画喫茶・受付（夜）

クオンと花、受付に立っている。

店員「では会員証をお作りしますので、身分

証のご提示をお願いいたします」

クオン「……あの（財布から会員証を出して）

ここでは必要なかったですけど」

店員「申し訳ございません。都内の店舗では

身分証のご提示が義務付けられてまして」

クオン「……そう、ですか」

花「（クオンを見つめ）……」

○ 街中（夜）

クオンと花、歩いている。

クオン、スマホで都外の漫画喫茶を検索
している。

クオン「一番近くて……1時間くらいかな」

立ち止まる花、ある場所を見つめている。

クオン、花の視線を辿ると――。

ラブホテルの料金表がある。

クオン「……」

花「交通費入れたら、あんま変わんないかも」
クオン「でも」

花「もう変なこと言ったりしないから」
クオン「……」

花「ねえ」

花、眼鏡を指して、

花「あんな遠くの文字読めた。凄くない？」

クオン「……（笑って）ああ。そうだ。うん。

とても似合ってるよ」

花「クオンの気持ちも、前より少し分かる気がする」

クオン「……え？」

花「後悔してる？」

クオン「……」

花「私と……一緒にいること」

クオン「そんなことないよ」

花、クオンを見つめている。

クオン「……」

クオン、思わず視線を逸らすと、

花「……（笑って）行こう？」

クオン「……」

○ ラブホテル・客室（夜）

花とクオン、部屋に入って、

花「なんか……意外と普通だね」

花、バスルームを覗いている。

携帯の着信が鳴る。

クオン、スマホを取り出す。

花、不安げにクオンを見つめている。

クオン「（笑って）お母さん」

花「ああ、うん」

ベッドに座るクオン、電話に出る。

※以下、クオンと母の台詞ベトナム語

クオン「もしもし？」

母「（泣いている）……クオン」

クオン「……どうしたの？」

母「ダンさんの息子が、亡くなったって」

クオン「……え？」

母「全部嘘だったんだよ！ 本当は仕事もなくて、ずっと一人で……最後は……最後は、

自分から」

クオン「……」

母「あんたは？ 本当に大丈夫なの？ 本当
にちゃんとやってるのよね？」

クオン「……」

母「クオン？」

クオン「……ああ、うん。大丈夫だよ。心配
しないで……（明るく）ごめん、仕事戻る
から。また連絡するよ」

クオン、電話を切る。

花「……なんかあった？」

クオン「ううん。元気かって」

花「そっか」

クオン「……」

花、クオンのスマホを見つめている。

花「あのさ……雄大はどうして、クオンの番
号を知ってたのかな」

クオン「……ああ、彼から聞いた訳じゃない
けど……おばあさんが倒れたとき、ボクの
で家に電話したよね？」

花「……雄大が出た」

クオン「うん」

花「でも……どうしてそこまでして」

クオン「ただ、ハナのこと心配して——」
と言いかけ、黙っている。

花「クオン？」

クオン「彼は、本当に何も知らなかった？」

花「……え？」

クオン「電話で、彼、とても必死だった。お
父さんが探してる。だから早く逃げてって」
花「……（笑って）それは、何か勘違いして
るんだよ。私とクオンのこと」

クオン「あの夜、ハナの家の前で彼を見たよ」

花「……ああ、ランニングでしょ？ しょっ
ちゅう行ってるから」

クオン「少し、様子変だった」

花「……」

クオン「彼の部屋は？ 何処にある？」

花「……私の、となりの部屋」

クオン「それで、何年も気付かない？ あの

日だって、もし彼がいたら」
 花「お父さんは知ってたんだよ。雄大がいな
 いて」

クオン「でも」

花「雄大はなにも知らない！」

クオン「……でも、ハナさっき言ったよね？」

花「……」

クオン「自分の家は普通だ。自分が……なにも
 も考えなければ良いって」

花「……」

○ 畑道（夜）

ランニングをしている雄大、立ち止まる。

目の前には規制線が貼られている。

その奥には焼け朽ちた家屋がある。

雄大、その様子を見つめている。

クオン（オフ）「彼は？ 彼ももし、そうだ
 ったとしたら？」

○ ラブホテル・客室（夜）

花「……そんなこと」

クオン「でも、ハナは帰らない決めた」

花「……」

クオン、花の体を引き寄せて、

クオン「ハナには、ボクがいる……（声を震

わせ）ハナは……ハナは、一人じゃない」

花「……クオン？」

クオン、花にキスをする。

花「……」

目を閉じる花、受け入れる。

クオン、花をベッドに倒して――。

花、じっとクオンを見上げている。

クオン、その眼差しに戸惑い、

クオン「……」

クオン、花の眼鏡をゆっくりと外して。

花、ぼんやりとクオンを見つめている。

クオン「……ボクは」

花「……」

クオン「キミを、愛してる」

花「……」

花の目に涙が浮かぶ。
クオン、花を抱いていく。

○ 高架下（数日後）
車が停車している。
クオン、助手席に座っている。
運転席の男に万札を手渡している。

○ 地下鉄の駅・ホーム
クオン、ベンチに座っている。
手元の偽造在留カードを見つめている。
電車到着のアナウンスが流れる。
ホームの先から電車が走り込んでくる。

クオン「……」
クオン、ゆっくりと立ち上がる。
吸い込まれるように線路へ向かって。
電車の前灯が視界を照らす。
クオン、その光の中に身を投げる。
× × ×

ホームに到着した電車のドアが開く。
クオン、ベンチに座っている。
携帯の受信音が鳴る。
花から『204号室にいます』とメールが届いている。

クオン「……」
在留カードを財布に収め、立ち上がる。

○ インターネットカフェ・個室
花、履歴書を書いている。
『本人希望記入欄』に『寮での生活を希望しています』と書き込んで、

花「……」
パソコンのブラウザを立ち上げる。
検索窓に『ベトナム人 技能実習生』と打ち込み、検索結果をスクロールする。
× × ×

花とクオン、カップ麺を食べている。
クオン「仕事、決まりそうだよ」
花「……え？」
クオン「紹介してくれるところ探したよ。明

日行ってくる」

花「……あのね、私も働こうと思って」

花、フリーパーパーを取り出す。

表紙には『寮付きおシゴト特集』とある。

クオン「……」

花「受かるかは分からないけど……これ以上

クオンに迷惑かけるわけにはいかないから」

クオン「迷惑じゃないよ」

花「でも」

クオン「ボクはこのままで良い」

花「……」

クオン「次の仕事、日本人と同じお金もらえるよ。働く場所が決まったら、そこでまた

泊まれるところ探せば良い」

花「いや……」

クオン、食べ終わったゴミをまとめる。

花「……さっきね、クオンみたいに。クオン

みたいに仕事をなくして困ってる人、沢山

いるんじゃないかって思って。前にニュー

スとかでも見たことあったし……それで調

べてみたんだけど、色々相談できるところ

があるんだって。もちろん無償で」

クオン「……」

花「前の会社がくれなかったお金返してもら

ったり、また新しい職場で働けてた人もい

るんだって。後で一緒に調べてみよ——」

クオン「ボクは行かないよ」

花「……どうして？」

クオン「今までだって、会社の組合言うところ

ろ相談したよ。だけど、最後は会社の言う

通りしろ、できないならベトナム帰れなる。

それだったただのフェイクかもしれない」

花「……でも」

クオン「ハナだけだよ」

花「……」

クオン「ボクが信じてるのはハナだけだ」

花「……」

クオン「ハナは違うの？」

花「……」

花、言葉が出てこない。

クオン「……明日早い。シャワー行くよ」

クオン、着替えを取り出すと、

花「もしさ」

クオン「……」

花「もしクオンが、また働いて……それで、納得できるお金が貯まったら、その先はどうするの？」

クオン「……」

花「……帰るんじゃないの？ ベトナムに」

クオン「……」

花「そのとき私は、どうすればいい？」

クオン「……」

花「このままじゃ私——」

クオン「ごめん、考えておくよ」

クオン、部屋を出ていく。

花「……」

× × ×

電気の消えた部屋。

花とクオン、就寝している。

花、眠れない様子で天井を仰いでいる。

すると呻き声が聞こえる。

花、クオンに視線を向ける。

額に汗を浮かばせうなされている。

花「……クオン？」

クオン、足を抱え込んでいる。

花「……」

花、クオンのズボンの裾を捲る。

切り傷を負っていたふくらはぎが異様な

腫れ方をしている。

花「クオン？ ……クオン！」

クオン、うなされ続けている。

○ 郊外の駅・表（朝）

クオン、コインロッカーに荷物を入れる。

花、不安げにその様子を見つめている。

クオン「（笑って）そんな顔しないで」

花「やっぱり……病院行った方が」

クオン「あ、そうだ」

と、財布から千円札を取り出して、

クオン「今日の分」

花「……」

クオン、花の手に握らせて、
クオン「じゃあ、行ってくるよ」

クオン、駅へ向かう。

花、その背中を見つめている。

○ 立体駐車場

クオンと数名の外国人、社長（52）に
誘導され、ワゴン車に乗り込んでいる。

社長「事務所まで20分くらいだから」

社長、エンジンをかける。

○ 老人ホーム・前の道

求人誌を持った花、立ち止まる。

施設を見上げて、

花「……」

○ ワゴン車・車内

クオン、具合が悪そうに汗を拭う。

車が停車して、

社長「何だよ、こんなところで」

クオン、窓の外を見る。

警察官が検問を行なっている。

クオン「……」

○ 老人ホーム・職員室

施設長（45）、履歴書を見ている。

花、その向いに座っている。

施設長「もし渡辺さんが良かったら、来週の

月曜からお願いできないかしら？」

花「……え？」

施設長「（笑って）ごめんなさい。あんまり

即決だと不安よね？ 人手が足りなくて」

花「いえ、そんな……あの、ありがとうございます」

います！ よろしくお願いします」

施設長「じゃあ早速なんですけど、今日って身

分証は持ってるかしら？」

花「……」

施設長「保険証か……なかったらキャッシュ

カードでも大丈夫なんだけど。何か名前を

確認できるものはあるかな？」
花、表情が硬直している。

○ 国道

パトカーと数台のワゴン車が停車されている中、外国人たちが一人ずつ車から下され身元調査を受けている。

クオン、ワゴン車を降りる。

調査員「在留カードは？」

クオン、在留カードを手渡す。

調査員「……定住者ってことは、日本に家族がいるの？」

クオン「はい」

調査員「名前は？」

クオン「ダン・ヴァン・タイン」

調査員「生年月日は？」

クオン「……」

クオン、答えることができない。

社長「聞いてないですよ！　なんで俺まで行かなきゃなんないんですか!？」

社長、他の調査員と揉めている。

社長「協力してあげたんでしょ？　俺がなにしたって言うんだよ！」

社長と調査員たち、揉め合いになる。

その場の注目を集めている。

クオン「（辺りを見渡し）——」

クオン、走り出す。

調査員「お、おい！　逃げたぞ！」

クオンをきっかけに、他の外国人たちもその場から逃げ出そうとする。

現場が混乱する中、必死に走るクオンを追ってくる調査員がいる。

クオンに追い付き、拘束する。

抵抗するクオン、調査員を突き飛ばす。

ガードレールに衝突し転倒する調査員。

その頭から血が広がっていく。

クオン「……!!」

他の警察官が走ってくる。

クオン、その場から走り去る。

○ インターネットカフェ・個室（夜）

花、書類を見つめている。

見出しには『採用時提出書類』とある。

メールの受信音が鳴る。

花、パソコンを見ると――。

クオンからメールが届いている。

花「……」

○ 郊外の駅・表（夜）

花、辺りを見渡している。

クオン、コインロッカー前に座っている。

花、クオンのもとへ駆け寄って、

花「……どうしたの？」

クオン、荷物を抱え立ち上がる。

花の手を引いて、

花「どこ行くの？」

クオン「遠くに」

花「……なんで？ 仕事決まったの？」

クオン「騙された」

花「え？」

クオン「ここいると危ない」

クオン、強引に花の手を引いて、

花「待って……私家に帰る！」

クオン、立ち止まる。

花「……仕事が決まったの。でも身分証が必

要で……本当バカだよ。そんなことも知

らないなんて」

クオン「……持ってなかったの？」

花「お父さんが持つてるから……だから取り

に帰る。それでまた戻ってくる」

クオン「無理だよ！ 渡してくれない」

花「だから病院行くとか言って、それで」

クオン「ずっとできなかつたのに？」

花「……」

クオン「そんなチャンス、今までいくらでも

あったでしょ？」

花「……」

クオン「金はどうする？ 花がここまで来れ

たのは、ボクがいたからだ！ 花は一人だ

と何もできない！ だから一緒に――」

花「やめて！」

クオン「……」

花「……今のクオンは、お父さんと似てる」
クオン「……」

花「……ねえ、どこか相談できるところがあるはずだよ。それでちゃんと病院行こうよ」
クオン「もう遅いよ」

花「どうして？」

クオン「ボクが邪魔になった？」

花「……なんで？ 違う！」

クオン「……」

花「……確かに、今思えばそんなチャンスいくらでもあったのかもしれない。でもそんなこと思えなかった。だって……何も考えないようにしてたから。何も考えたくなかったの！ 今どうなろうと、この先どうなろうと、何も考えないことに必死でそんなこと思えるわけなかった！」

クオン「……」

花「このままだと、きつとまたそうなる」

クオン「……」

花「このままだと私、クオンがいなきや生きていけなくなる！」

クオン「……それは、ボクだよ」

花「……」

クオン「ボクの知り合いが、日本で死んだ」

花「……え？」

クオン「ボクと同じだよ。会社から逃げた。ボクだって……ボクだっていつそうなるかわからない。ただボクは、一人なるの怖かった……不安で、仕方なかった」

花「……」

クオン「だから、ハナを」

花「……」

クオン「……（笑って）いけないね。ハナといるの、凄く楽しかった。だけど今のボクは、自分のことしか考えることできない」

花「……何がいけないの？」

クオン「……」

花「寂しくて、不安で……一人になるのが怖

くて。それで誰かと一緒にいたいって、そう思う気持ちの何がいけないの？」

クオン「……」

花「……そりゃあさ、たまたまだったかもしれないよ？ 私のこと、可哀想だって思っただけかもしれない。けどあのとき、私を助けてくれたのはあなたなの！ この先どうしよう、どうやって生きて行こうって考える力をくれたのはあなたなんだよ！ 考えることができたから、だから不安になるの！」

クオン「……」

花「助けてくれる人がいるはずだよ。今から一緒に行こうよ？ そこで私が戻るの待っててよ。それでさ、それから先のことはまた一緒に考えよう？」

クオン「……」

花「クオン！」

クオン「うん、分かったよ」

花「……」

クオン「……（明るく）だけど、ボク一人で大丈夫だよ。身分証、すぐ必要でしょ？」

花「でも」

クオン「心配しないで。もう逃げたりしない。だけど、仕事は待ってくれないよ？ せっかく決まったんだ。急がないと」

花「……」

クオン「ハナは帰って、必ず戻ってくるんだ」
花「……うん」

クオン「……ボクはこれから、助けてくれる場所探すよ。ハナが言ったみたいに、お金返ってくるかもしれない。また働けるかもしれない。だけど、もしそれが……（笑って）あー、簡単じゃなくて。ベトナム帰ることなっても、ハナが、ハナがボクと会って、少しでも良かった思えることになったら。ボク、日本来て良かった思える」

花「……」

クオン「今までのこと、なかったことにもしない。ただ、運悪かったとも思わない。だ

ってそれは、全部ハナのためだったんだ思
えるから」

花「……」

クオン「ボクに、日本来た理由、ちようだい
？」

花「……ずるいよ」

クオン「ズルイ？」

花「勝手だってこと！」

クオン「知ってるよ」

花「……ふざけないで、こんなときに」

クオン「怒らないでよ」

花「怒ってない！」

クオン「（笑って）……もつと怒って、もつ
ともつと怒れるようになったら」

花「……」

クオン「その分、沢山笑えるようになる」

花「……」

クオン「待ってるよ」

花「……」

○ 同・改札・内（夜）

改札に入った花、振り返る。

外にはクオンが立っている。

クオン、手を上げる。

花「……（ほほ笑んで）」

花、人混みの中を進んでいく。

ホームへ続く階段を上がる。

花「……」

花、ふと足を止め、振り返る。

クオンの姿が消えている。

花「……」

○ 路地裏（夜）

クオン、その場に崩れ落ちる。

ガクガクと手足が痙攣している。

クオン「（息を荒げ）——」

その手を押さえ、立ち上がる。

○ バス・車内（夜）

窓の外には田園風景が広がっている。

花、その風景を見つめている。

○ 渡辺家・表（夜）

花、門角の前で立ち止まる。
家の中には明かりが灯っている。

花「……」

○ 同・事務所／居間（夜）

花、玄関から入ってくる。
事務所から居間へ進むが、誰もいない。

花「……」

耕平「お帰り」

花、ハッと振り返る。

玄関に耕平が立っている。

耕平「（笑って）そんな驚くことないだろ」

花「……」

耕平「なんだその眼鏡？ 似合わねえ」

耕平、居間に上がって、

耕平「おい雄大！ 姉ちゃん帰ってきたぞ！」

雄大、階段から下りてくる。

雄大「……姉ちゃん」

耕平「なに突っ立ってんだよ」

花「……」

花、居間に上がる。

耕平、酒瓶とグラスを手に座って、

耕平「悪かった」

花「……え？」

耕平「ばあさんのこと、お前に任せきりだった。それに、今思えば学校のことも。なんで行かなくなったのか、もつと話を聞いてやるべきだった」

花「……」

耕平「そういうとき母親がいれば……そうだな。そういう意味でも、お前には辛い思いさせたと思ってる」

花「私は」

と言いかけ、雄大に視線を向ける。

雄大、花を見つめている。

花「（飲み込んで）……」

耕平、酒をグラスに注いで、

耕平「さっき弁護士と会ってきた。俺はそのうち裁判にかけられる。それなりの覚悟はしていたが、執行猶予がつくらしい。だから生活は今まで通りだ。安心しろ」

花「……」

耕平「明日病院行くぞ」

花「……病院って、おばあちゃんの？」

耕平「知り合いにさ、お前のこと相談したんだ。そしたら、娘さんは心の病気だって言われたよ……（笑って）俺だって驚いた。まさかお前がそんな、病院に行くほど深刻だとは思ってなかったからさ」

花「……なに、言ってるの？」

耕平「けど考えてみたんだよ。お前はいつも無気力で、自発性がなくて、被害妄想も多い。それに今回のことだって……あれは立派な自殺行為だ」

花「……自殺？」

耕平「俺の前から飛び降りただろ？ 覚えてないのか？」

花「ちよっと待って！ 私は――」

耕平「私私って、お前は自分のことしか考えらんないのか？ 俺だってずっと見張ってるわけにいかない。入院すればその心配はなくなる。黙って言う通りにしろ」

雄大「自分のことばっかなのは父さんの方だろ？」

花「……」

耕平「……今なんて言った？」

雄大「……」

耕平「なんだ？ その口の利き方は。俺はお前の父親だぞ？」

雄大「……父さんの子供になんかなりたくないかった」

耕平「なんだとこの野郎！」

花「やめて!!」

雄大、居間を出ていく。

花「……私、仕事決まったから」

耕平「……」

花「ここを出て働く。だから……だから入院

なんかしない。お父さんの言う通りにはならない」

耕平「何だお前ら？ 姉弟揃って反抗期か？」

花「迷惑はかけない！ だから——」

耕平「ふざけるな!!」

耕平、壁にグラスを投げ付ける。

花のもとに歩いてくる。

耕平「考えてみる？ お前になにができる？
なんの価値がある？ ちょっと外に出たか
らって良い気になるな!!」

花を壁に押し付けて、

耕平「言ったよな？ お前は一人じゃなにも
できない。お前みたいな人間は——」

花「一人じゃない」

耕平「……ああ？」

花「私は……私は一人なんかじゃない！」

耕平「……（笑って）お前、もしかしてあの
男のこと言ってるのか？」

花「お父さん」

耕平「利用されてんだよ。アイツはな」

花「もう私の邪魔しないで」

耕平「……」

花、居間を出ていく。

○ 同・事務所（夜）

花、デスクや収納ケースを漁っている。

耕平、事務所に降りて、

耕平「なにやってんだよ」

花、デスクに置かれた財布を開く。

耕平「勝手なことすんな！」

花、保険証を見つける。

耕平、その腕を掴み上げ、

花「離してっ——触らないで!!」

花、耕平を振り払う。

ハサミを手に耕平に向ける。

花「（息を震わせ）」

耕平「……（笑って）なんでだよ」

耕平、ハサミの刃を握って、

花「……」

耕平「現実って、なんだ？」

花「……え？」

耕平「お前は……ここにいるよな？」

耕平、その手に力を込める。

血が滴り——花の手を伝う。

花「（見て）——」

花、咄嗟にハサミを手放すと。

耕平、花をデスクに押し付ける。

花「!!」

花の体に手を伸ばして。

花「——いやだああ……!!」

耕平、抵抗する花の顔を殴って——。

花、ぼんやりと視線を漂わせる。

ふと玄関に視線が止まる。

ドアの外には雄大が立っている。

花「（見て）……」

雄大、花を見つめている。

× × ×

※フラッシュ（5年前）

その視界はぼやけ、不鮮明である。

ドアの外に立っている雄大（10）、

こちらを見つめている。

花、ベッドで体を弄ばれている。

ぼうっと雄大を見つめ返している。

× × ×

鈍い音と共に、呻き声上がる。

花「（我に返って）……」

花、顔を上げると——。

頭から血を流した耕平が倒れている。

花「……!!」

視線を上げると雄大が立っている。

ゴルフクラブを握っている。

花「……」

雄大、その場に崩れ落ちて、

雄大「……姉ちゃん」

花「……」

雄大「なんで帰って来たんだよ？」

花「……」

雄大「せっかくこの家から出れたのに！

んで帰って来たんだよ！」

な

花、茫然と雄大を見つめる。

呻き声が聞こえる。

耕平、意識を取り戻している。

花「（耕平を見つめ）——」

花、咄嗟に身分証を拾って。

バッグを手に立ち上がる。

雄大「ひとつだけ……聞いてもいい？」

花「……」

雄大「嫌だったんだよな？」

花「……」

雄大「姉ちゃんは……ずっと……本当はずつと、嫌だったんだよな？　そうだよな？」

花「……」

花、耐えきれず、涙がこぼれる。

花「……うん」

雄大「……」

花「雄大」

雄大「……」

花「ごめん」

花、玄関から出ていく。

耕平「——あ……あっ」

耕平、言葉にならない声を上げている。

雄大「……」

○ 畑道（夜）

走り続ける花、転倒する。

体を起こすと手足が震えている。

花「（呼吸が乱れ）……」

ふと視線を上げる。

遠くに電話ボックスが見える。

花「……」

○ 渡辺家・事務所（夜）

耕平、床を這いつくばっている。

玄関の引き戸に手を伸ばす。

——が、扉は開かない。

○ 同・表（夜）

雄大、庭先に立っている。

空の石油タンクが転がっている。

雄大、マッチに火を付ける。

雄大「（火を見つめ）……」
マッチを縁側に放つ。
目の前に火炎が広がる。

○ 電話ボックス（夜）
花、電話番号を入力する。
受話器を耳に当てる。

花「……」
呼び出し音が続いている。

○ 公園・公衆トイレ（夜）
誰もいない室内。
携帯の着信が鳴っている。

○ 電話ボックス（夜）
呼び出し音が続いている。

花「……」

呼び出し音が止んで、

花「もしもし？」

応答はない。

花「……クオン？」

○ 公園・公衆トイレ・個室（夜）
クオン、壁にもたれ崩れ落ちている。
痙攣が口元まで進行している。

その手にはスマホが握られている。

花の声「もう、大丈夫だから」

○ 電話ボックス（夜）
花、受話器を持つ手が震えている。

花「……全部、終わったから」

○ 公園・公衆トイレ・個室（夜）
クオンの表情が、微かに和らいで、
花の声「クオン？ ……ねえ、何か言っ——」

その手からスマホが落ちる。

クオン、ぼんやりと視線を漂わせる。

その視界は徐々にぼやけていく。

○ 電話ボックス（夜）

花「……クオン？ クオ——」
通話が切れ、和中音が流れる。

花「……」

○ バス停留所（翌日・早朝）

夜明けが近づいている。
花、ベンチに座っている。
ぼんやりと朝日を眺めている。

花「……」

サイレンの音が聞こえる。
花、視線を向ける。
消防車が近づいてくる。
花、その回転灯を見つめている。

× × ×

※フラッシュ（冒頭シーン）
赤い光が視界を照らす。
自分に絡みつく手足のうごめき。

× × ×

バスの乗車口が開く。
顔を上げる花——息が浅い。
バスが停留所に停車している。

花「……」

○ バス・車内（朝）

花、ぼんやりと座席に座っている。
ふと窓ガラスに視線が止まる。
眼鏡を掛けた自分が映っている。
真っ直ぐ自分を見つめ返してくる。

花「……」

その顔に雨粒が当たる。
花、視線を上げる。
サラサラと雨が降っている。

花「……」

花、眼鏡を外すと、雨は見えない。
窓ガラスに視線を向ける。
自分の姿がぼやけて見える。
その自分と寄り添うように——。
窓にそっと頭を預けた。
遠ざかる田園風景。
バスは河川を渡っていく。

（完）